

目的 妊婦の体型は胎児の発達に伴って逐次変異するが、特にその変化の著しい妊婦後期における着衣のありかたは妊婦の心身に大きく影響を与えられる。妊婦の心身をまもる衣服をどのように設計すべきかを、経時的体型変異や動作時変化量などを通して考察を加えたので報告する。

方法 被験者は平均年齢26.7才、身長 \bar{x} 155.1cm、s 4.3cm、当初のバスト \bar{x} 93.2cm、s 6.8cmの健康な妊婦である。妊婦週数26週以降の妊婦を対象とし、心身の状態を考慮しながら出産前までの可能な週までを追跡計測した。計測項目は長径9、幅・厚径8、周径8、体表に沿った長さ11項目と体重を加えて37項目とし、動態もあわせて計測した。その他、シルエッター・スライディングゲージで身体形状を把握した。また、階段昇降時の着衣実験から下体部の動作適合性および安全性の問題を考察した。

結果 追跡計測の結果、各被験者ともに前腹部の最突出点の著しい変異や胎児の上縁にあたるウエスト位置の変化などから体型の変異が顕著にうかがえた。ウエストラインの決定に伴う前・後スカート丈の差が極めて大きく、衣服設計上考察する必要を認めた。下体部の運動適合量を加えたスカートの着用による階段昇降では、妊婦の視野範囲から安全性に問題があることがわかった。妊婦の通常着の実態調査からこれを裏付ける資料が得られた。前屈時の体表の変化についてその増減を調べると、前股上で-25%、後股上で+18.6%にもおよんだ。